

森の妖姫

小川未明

青空文庫

何いつの時代からであるか、信濃の国の或る山中に、一つの湖水がある。名を琵琶池といつて神代ながらの青々とした水は声なく静かに神秘の色をたたえて、木影は水面すいめんの暗きまでに繁りに繁り合あうている。人も稀まれにしか行かない処で、春、夏、秋、冬、鳥の啼なきごえ声と、白雲の悠々と流れ行く姿を見るばかり。

偶たま々また道みちに迷まようて、旅人のこの辺あたりまで踏ふみ込んで、この物怖ものおそしほりの池いけの畔ほとりに来て見ると、こは不思議なことに年若い女おんなが悄しよんぼり然ぜんと佇たたずんで、自分の姿をその白銀しろかねのような水面みのもに映うつしてさめざめと泣ないでいるのを見る。旅人は斯こ様な山中こんなにどうして斯こ様な女おんながいるかと怪あやしみながら傍たがへ行いこうとすると、蔦つた葛かずらや、茨いばらに衣いのか

らまつて、容易に行くことが出来ず、声を上げて女を呼ぶとその
声音が不思議に妙な反響を木精こだまにたてて、静かな死せるような水
面がゆらゆらと揺ぐゆぐ。ぞつとして踵きびすを返して、一生懸命に野を横
ぎり、又もや村里かたの方を指して程少し来ると思う時分に百万の軍
勢が関とぎを造つて、枯野を駆けるがように轟ごうと風やら、雨の物音が
耳みみもと許もとを襲う。この時には麓ふもとの村々には大雷雨があつて、物を知
れる年寄などは又誰れか池で身投みなげをして死しぬんだな、と噂うわさをするの
である。而してその旅人は何処いずくへ行つたやら再び姿を見ぬ。

昔、昔、ずっと昔に或る忠義な武士さむらいがあつて主君の非行を諫か
言んげんし奉たてまつつた。すると癩癩かんしゃくもち持もちの君は真二つに斬り下さげんと刀の
束つかに手をかけたのを、最愛の妾おんぬたわらが傍わらから止めたので、命だけは賜たま

わつて、国外に追放の身となつたのである。その実妾は却つて武士を愛していたので、驪やがて自分もその武士の後を慕うて、一夜暗やみにまぎれて城を逃げ出た。而して漸ようやく追いついて自分の意こころの中ちゆうのありたけを語つた。武士は妾の請こいに少なからず当惑したけれど、もはや何れいずにしても命のない女の身を可哀そうに思つて、意を決して二人は手に手を取り合つて、秋将まさに深き信濃の山路に逃げのびたのである。而して三年この池の畔ほとりに二人は安樂に暮した。しかるに一日夫は狩獵かりに出かけた限り家に帰えらなかつた。妻は案じて野の末くまを隈なく探して見ると、何者に殺されたか、切り捨てられた屍しかばねを見出したのである。やがてそれは君の追手の者に殺されたということが分つた。何時いつしかその年も暮れてしまふ。明あく

る年の春、うす紫の藤の花が咲く時分に、ついにこの憐むべき女は狂わしの身となつて、人を怨み世を憤つて、遂にこの池の中に身を沈めて、妖^{ようれい}靈に化したのである。道行く旅人、野に分け入る百姓等は相戒めて、決して琵琶池の辺りに近かないという。

もはや春もくれて、雲白き南信濃路に夏の眺めを賞せんものと、青年画家の一人は画笔を携えて、この深山路に迷いに迷い入つた。緑滴るばかりの森影に、この妖姫の住める美しの池は漣を立てて、寂として声なき自然の万象をこの鏡中に映じている。青年は池の畔りに腰を下して、名もなき花の、咲き満つる、青草の上にカンバスを構えた。

都を立出でて、既に六十日、今や盛夏を告げ顔なる、蟬や、蝸

の声などが聞える。それにしてもこの艶々つやつやしい池の畔の草木の
 緑葉の眺めかな。赤々として熱そうな、日入いりひの影が彼方むこうの松林に
 照りつけると、蝸の声は深山の溪間たにまで鳴くのである。もはや帰る
 べき時は来きたった。

やおら青年は起たち上らんとする時、悲しき、嬉しき歌の声は杜もり
 の彼方かなたに聞える。彼は耳を澄まして、昵じつと彼方を見詰めた。空色
 の衣物きものに緋の袴を着て、房々ふさぶさとした黒髪を垂れたる美女は梢の
 繁みを払って、我が方かたを差し覗のぞいているように思われる。はつと
 して青年は心臓の血潮を躍おどらすと、もはやその姿は歌と共に消え
 失せてしまった。

次の日も青年は、写生に出掛けた。而そしてその歌をきいた。や

はり美しいの姿は半ば木の葉に隠れて此方を覗く様子は昨日と異ならない。この度ばかりは……と躊躇間に早や何処へか消えてしまふ。その夜は寝てもただ一目見し森の少女の恋しくも、夢に見え、幻となりて時々目に浮ぶのである。何処の者ぞ……名は何と云うぞ。してその姿の怪しくも華奢やかに装いつるかな。

白雲は折々、湖面を渡つた。風は折々樹の葉を鳴らした。人も来ない、寂しい山中のこの辺の景色、永劫の自然を思い、人生の須臾なるを痛んで、青年は一幅の画中に長えにうら若き彼の少女を書き入れんと眸を森の彼方に送る刹那、いつもの悲しき、嬉しき歌の聲がきこえた。気のせいか何となくいつもより悲しい。

うっとりで見れば、若者の恋しい。

昔ながらの、青く、動かぬ水に映つる。

絵筆とる、指の白くて、

その面形おもかげの、何とこのう、恋しの夫つまに似たり。

紅き野薔薇の花を摘んで、唇にあてれば、胸の血潮が沸いて、
耳みみたぶ朶たぶが熱する。

よそよそと吹く夕風、怨うらみもとけて酔えい心地となつた。若わかや
かな、恋をば又してみようか。

月の上る頃ころい、水辺の森に来て、琴を鳴らし、ああ、頸くびに掛
けたる宝たま玉を解いて、青わかもの年ちぎりに契ちぎりを結むすぼう。

あれ、彼処あしこに我が兄子せこの、狩の扮装いでたちをして野原に馳はせて行きやる。あれ、馬から落ちられた。

ああ、血潮を浴びて、白羽の矢が額いとおを射貫いとおしたわいのう。

水に映る白雲の、いつしか消えてしまった。西の夕焼あかあかと、

木々の葉風の怪くしく光る。

許してたもれ！ 許してたもれ！ 暴風雨あらしよ疾とく天あまつ日の光り

を掩おおえかすと魔女は森の中に駆け込んだ。天てん日じつ遽にわかに搔かき曇とつ

て、湖面の水黒く渦巻き返える。疾風は林を掠かすめ、森を掠かすめ、野

を掠め、雲乱れて飛び、蝸の泣声止んで、せきばく 寂寥として天地は静
 まりかえった。青年画家は麓を志して道をいそいだが、うしろ 後方の山
 を越えて、千軍万馬の襲い来る鉄蹄てつていの響きや、馬の嘶いななきをきいた。
たちま 忽ち雨やら、風の物音が耳許みみもとを襲う。それぎり青年画家の行衛ゆくえ
 は知れなくなつてしまつた。その夜は近隣の村々に黒風こくふう、白びやく
う 雨はたけ猛りに猛り狂いに狂つた。その明あくる日は、ぬぐ 大空は拭うた
 ように晴れ渡つて、朝日影が麓の家々の白壁に落ちる、熱さは一ひ
としお 入加わつて、蝸の声は汗をしぼるがように、野や、森や、並木
 や、雑木林に聞かれた。その後暫しばらく、魔女は姿を見せなくなつ
 た。今でも物静かなる琵琶池には画筆や、カンバスなどが浮いて
 いる時があるが、人が近づくと沈んでしまふそうな。

青空文庫情報

底本：「文豪怪談傑作選 小川未明集 幽霊船」ちくま文庫、筑
摩書房

2008（平成20）年8月10日第1刷発行

2010（平成22）年5月25日第2刷発行

底本の親本：「愁人」隆文館

1907（明治40）年6月25日発行

初出：「趣味」

1906（明治39）年7月号

入力：門田裕志

校正：坂本真一

2019年3月29日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

森の妖姫

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>